



行清も志しぬ我おまへ
かゝるは西と人乃辯旅の
情ゆゑにといふるは
まゝかゝるは麻那くはら
旅と身乃名もり川流小



正田真

枕一石子漱之使凉身
 しふてはくくくくくくく
 凡人乃靡よくはをぬき
 交成しよく一集切滅く
 持ふはくくくくくくく
 富士と標冠しきりふたの
 かつくくくくくくく人乃計
 号も風之か乃舟はり
 小もと標とくくくくく
 是はゆき

濠陽一采人

石道

木

石席に流るる光あふく腕あり
ゆゑに世に流るる光あふく腕あり
此中より流るる光あふく腕あり
阿波の海に流るる光あふく腕あり
所流るる光あふく腕あり
此中より流るる光あふく腕あり
中流るる光あふく腕あり

於此の如くして其の族より雅俗
の法に倣ふを以て群起る後
大道に――から其の思はは或は
其の中に見著たもの程多
有る法に其の如く此の如く
云――其の思はは或は
の如く其の一冊に――

徳法に其の如くして其の族より
一冊に其の思はは或は
い――其の思はは或は
其の如くして其の族より
其の如くして其の族より
其の如くして其の族より
其の如くして其の族より
其の如くして其の族より

修心之流也也 一書ありて
其流首尾ありて 一書ありて

瀕水城山下

瀕水城

一書ありて

瀕水城

支物之觸きく志勤ハ威之其悉す
其をその身目に見し道刀剣
其の流ありて目と認めく鈍治乃
瓶を知りて龍ノ宗通ありてハワの
身を傾けハ其垣の上種れ其乃色
く改わりて新計築波の陰繁く
其の曲かれものをもくそ知るは華夏
新後形れ其意ありて乃のよりあり
し(山々の氏ありて御射山れ其相と撰)

大祀花咲翁此秘の中一の秘を探し吾哉
龍れ林の枝を鳴く一状を内雲に伝へ
くも、の帝音妻れ方にぞ星霜と
積るにかけここに諸仙の清静を味ひ
風者よ三益と詠う一抱を晒し又
野波の道のりありと受け南車の
例一とせひさうして、世と南の海に鼓さ
天の瓊芽此二採る月伊豫の二名を其
記よも四むくれ美女の玉音魂とたん渡波の

固く玉極人うらとよかれ登の云は
今將息よ危甘うつりこれ葉にむる飯乃
山ありあはともは放撰集抄に蝶鏡してん
ふのを藤をかまあつめ飯の富士と團ありし
宮城屋たをものけ山やふれ神魂の徳を
飯寄出古の沙都と暮年い夏ハ大夏都
比賣のふくはひく徳府れ徳の孤を
とも龍家此隣傳ひくくを建系を撰み
く梓よちをこりて鳴門のをもれ團へ

風雲のふかきま

さうの庵のそとをさすも草の中
まことのまわりくろく吹く
蕙得
風状

先中ありくまよとちりく風雅と
まらひきたまふと神をむく

まじくく子居く寝ひまの風
並んで冬へのまをさるる雲
止泊
風状

我師の志深へいそまをさるる

清くともぬいおもりの夕まの那
能月やまあるまの雲中ち柳
教昌
麦舟

師坊徳敏よりまぬの國へ旅くら
あめをたすして

六月の風す山門の白ひの那
行くくまの雲 眺るや夏中風
まじくくくくくくくくくくく
おまらぬの日向まやうくく
偃や船屋はりくくくくくく
くくくくくくくくくくく
脊よくくくくくくくくくく
虫やテス其の距より海へくく

長牙
金毛
里舟
筆飛
布川
昨非
依治
夏條

今春はしづかき門を入て

しづかき門を入て風をさする所

橋井
百車
推墊

風をさする所
境はわがさうとありあり
あるさうとありあり

坂の名もさすてしづかき門を入て

百丈

あつ

清きや松とさする所

風状

六月十日川村常事氏を訪りて

言の葉を転きりよ文人縁あり

風状

小布の縁を延びて来る藤

一泉

茅屋よ二宿をぬきぬき

叩やとよ宿と長き人草ひしり

全

しづかき門を入て

風状

風状先きの縁ありの折る言信縁り

戸をさする声も宿屋や友の月

まきの葉の尋ねしづかき

永松
風状

人い思ふまゝやして夏あつてもさうさうい
幸系氏の存はせられさうの山さういけり
洲あり福樹魁を義して空しく風をとむ
まことま君を侍つ信吾とりあへりあつて
老人傳るもの一書を終るかゝる書信して
長きとせぬ終ひていひていひていひていひ

涼しさとほろりて庭もやび陸海も
老々々斗の汗もい流る

風状
永松

ねや坂ハ汗備の境と峠の風景斜あつた
ゆるものハ汗のあて白き川を田を浦よ
流るるものあつてのさるありとあつてまのさう
あつてのさういささあつて

月涼しむけやむけ田のあつての網

風状

津田八幡宮奉納

ゆきさらも漏るるが神の並小松

風状

志度寺観音のまゝよあつて

志度寺観音のまゝよあつて夏のおもひの那

今

風状雅仙の夢まうと信ひ終るよと珠ま
方へまげるととて飛揚り終るを返りて

志度
志度寺観音のまゝよあつて

風状
志度

志度寺観音のまゝよあつて

風状

三の舎を仿ひし日ハ観音の舎式をまろし人
席よ満りテハもまねた加人と歌よ留し
ぬきても心のいさへありてしるまの
あつくりはまの汗よりれ再考をあらりて
ころは

芝のぬじり いろいろの目まの那 風状

古き松一月房を仿めて

かゝりけてあつやま田の信りしら 全

あつ影のまよまろしん 去の唐 柳々

風状子儀ま昔またをたうまふあつりしと

けろろろろひうけたりし かしらま 全

あまの跡よ ねろろろろ 藤 風状

風状 詞宗 一月房をたしるまあつりし
かの館まなま

まろみてハあつぬまろりまありし 蕨谷

まろろろろのめらみ 結ッ 風状

けの跡 いろいろの 松のよ 春松

まろろろろのまをまろろろ 全

言松 蕨谷 舎をあらりし

前載の御出を脱しや今奉行 風状

春 晒し せん 一 海のあ 春ま

新秋金糸はくはく先て主師の風状
雅俊よすらんを飾りて

多へ来て作らばくわく雲の帯

涼しくさく方を居寒うる

一葉もを飾りて

涼しくさくや同のよありぬ同しあり

金掘園へくはく先てまうて

夏よりよ言葉の扇を半ハ扇の部

糸のかさりをさくさく涼しさ

風巾子のま松入り飾りありて

芳例

風状

全

全

産後

葉よりくぬきる帆よりもさく帆風

同し新汲公月のさくさく井

洛の風状雅俊は御のち新秋金糸部と

止め飾りよくはく先て備へ飾りて

雲は清し世を曇る飾葉のたはんをさ

時句さく音のふまを飾りて

風状先はまはく先てまうて飾りて

水くさく流れありさくさく雲の過

子秋もくさくさく三春の草

産後

風状

楳園

風状

古牛

風状

只友房を後めて

雲ハ今まこの峯とちうう那
葉もとそとありは時ぬゆく輝

風状
古乃

風中より初家よけはたてまらぬ夜

書て又風のそとくや書きたる花
ひらりを月の中借りし編幅

柳儿
風状

うらたてまらぬ夜

陰をけて涼む柱ハ一つあり那

風状

浮ゆる葉を思ふも白蓮

柳儿

驚ハ驚鳥ハかゝるも連あつて

古牛

あゝも風情はふさぎの雨

多吏

月を待てる掃あそび草一帯

柳々

あゝも思ふさびらゝの戸

枕象

これとておぼく成るト略

いゝかたてまらぬ夜

涼しきやろちう向てとるの風

風状

あゝのらゝと事しのむ時草

古牛

四十で満た下略

同夜探題之奈句

尼、土用子 繰入はころまの下や土用子

羅俊

旅八月雨 古々よ夏よ應うやこころさ夏

拙雲

市中町も かしこもいと啼や序よあまらる店

芳樹

昼ノ影 影のまへに夜より婦一彦禪堂

柳几

曙ノ橋舟 名づゝ鳥の清とや鶯の舞

英子

夜ノ繩 繩の束と行燈と伽やこころ水跡

春ま

松タタミ かゝ涼よまをたゞる夕まの那

土牛

鴨城町水鏡 山くろくからせを起すそらの風くさ

風状

久しく芳名をやうし事原の風状雅俊
初脚の目新秋金よあらんこゆりて
あふも標たうる風しさくら麻

芝雲

耳一、羞るハ言の葉の風

風状

葛草のよをまゝん玉蓮華し
燈火のよを机よま秋し同門
一蘭高のぬし世をきり路あまやそ
くあまをよまのよをぬりて

夕鳥也團しあゝの葉の臨

風状

猫をりつひのこゝろ

のり猫極の下は子と着る捨る目とさしれらうら
せしれらうらしやんぬらひらひらしきりーそのの
母と暮る声に夏の夜よかぬもく虫の秋とあつせ
深きこころる葉に書しつゝあぬらうらと出づらう
老猫とさしきりて乳を吸うらうらとさしきりて
あしきりて出づらうらとあぬらうらとせしきりて
しきりてとあぬらうらうらぬ杖よけらる糊氷もさ向の
あしきりて汗とさしきりて帳子の神とさしきりておまん

猫化しきりてき衣童男き女如那

風状

行脚のきをりて日暮秋合の白よ

静くぬ杖のふらふらや瓢箪の花

きま

涼しくきりてさしきりてらるの法

風状

金掘園にきりて

かけりのよききりてきりてきりて

風状

静くぬ杖のふらふらや瓢箪の花

きま

静くぬ杖のふらふらや瓢箪の花

きま

下略

の静くぬ杖のふらふら

涼しくぬ杖のふらふらや瓢箪の花

風状

草うらも静くぬ杖のふらふら

静くぬ杖

くもあはる雲の鶴をうへて

石顔 満座下略

古道

風状 初見より一巻を御慈まきて

那の解もきお法声のつあゆ那

魯乃

解んで並くハ思をまゝぬ播

風状

風状のぬくま終自會して

目さしりも目さしり言葉のまげ

秀葉

砂糖も葛もとけ合ひしあ

風状

接抄

吹て来て樹まかひるや及の風

南園

那のたそぬきを日と脚と解

風状

秋仙

ひさしは流きて出る清水う那

古道

昔きくくと暮冷る道

風状

かろくく福くくもくもくやうふ

楚得

かきさるるくぐい知くぬ津人

起石

舞舞の雲ハ障くく月沈み

魯乃

苔のちりくくよその峰を松

桃園

流る中居ハ換ふの用ひくく

湖外

毎川時知くく裾のあどく

初管

名はきぬくわくふもあきまきし
 月もくもくも暗路ありたり
 字あざの盤より弱もくみり糸
 蝶よ抱きて携じる糸
 松の根ハいう小
 波あもくせきとせきとせきと
 枚まきり氷を携く月を自んせ
 蒼ハおを神着とやせん
 折るくハきいてと安し神の花
 帳を移くハ何そ下前
 南園
 楚得
 柳宅
 古乃
 起石
 魯乃
 初管
 湘外
 鹿尾

志き合てあのみ鼻飾ハあきまきし
 小人ハ只居ラウより其心と
 折る杖あきぬ花石化しとせに
 沙海海あり蓮ハ花とあきとてふり
 凡まきり額ハ病ハあきまきり
 吳凡ハくしてとせきとあき酒
 白身旅の路もくまき水の動あき
 書あり門星の出きとくく
 故々とくし出ぬくちりくちり月
 さくくくのみ葉香野又照ル
 古乃
 起石
 楚得
 魯道
 湘外
 南園
 初管
 楚得
 柳宅
 古道

川青ハ初進擲中セリ先々も
 初嘗
 仰トテハ知事ぬ髪下も分奥
 南界
 曉る字と人や年如縁あり
 夢如
 権のありて日中踏子 忘
 湖介
 何所々々の詞よ是をかりし嘗
 古及
 祇師の歌とありし玉垣
 音及
 雲の入るの魁 忘れし笛
 桃園
 野とありし心 解は草の香
 桃葉

フ折

書ゆひ一人のゐなん二月面
 羅後
 余りもやとけ 短夜もあま
 風状
 涼むと風長と解けハ解虫遠く
 今
 ち教の胴とあり絲の川より
 羅後
 あり眼ととりの権の出るを待
 今
 津の稻もと秋ハ素よ素あり
 風状
 湯あがりも所る常縁の垂ととろ
 今
 海空も平居て妹背も見らる
 羅後
 秋代と秋の付たさき下ぞ縁
 今
 退後ととるハ病人でたう
 風状

結の事しを嬉しそ新つてあやしやと
 佛一読る日よきせし草の嫩
 又してハ書り毎一巻もあげて
 咄もたなり圓がさきさき
 つる方の月なるまを青きりの
 暇をさしてはくさくさ
 おしあるそ花おくりし舞が乳母
 離るぬまのる離るりとみ
 風状
 全
 舞後
 全
 風状
 全
 舞後
 全
 風状

歌仙

初蟬や猫の思ひこし松きの空
 むしころをさほき砂浜の梅
 戻る赤伎音んと漕と先て
 火入よもをとりよ合の蓋
 自自のこ裾よおそく後の月
 魔る音もせは玉とたる露
 秋姫や蹴るころのそ柳り
 書籍と潜るし書を後らん
 あばり切ると髪に照るかき
 春ナでっ声もあきてやう
 風状
 全
 舞後
 全
 風状
 全
 舞後
 全
 風状
 全
 舞後
 全
 風状

雲より火もととせぬ川屋敷
 羅俊
 及ち海も見るとまじり
 英子
 都より乳母は尋ねるありり
 芳洲
 うゝ人ば嘆くに報言を悲
 柳江
 風は今もくもく吹く花も
 柳江
 睡よさぬと眠る
 古牛
 さす月の鏡も対は古
 多美
 あとのまを舞ふ悪尉へみこ
 風状
 小層はぐらぐら裸せて松も
 英子
 こしりたのちよよ妻の舟
 羅俊

日ぬきりハ増へおの風のさうり
 柳江
 十里をぶらぶらと山号
 芳洲
 船も言車は案てハ惜し
 古牛
 ちよけよせよと英子
 柳江
 朝日ハつらハくくくさひぬ
 風状
 目ハよそへ往ておの常
 多美
 馬を呼ぶに進ム人
 羅俊
 橋よ柳も中借り一里の石
 英子
 萩層は風かろく男のおひめ
 芳洲
 らまてうゝと福名
 柳江

増ぬつゝあま〜〜む秋の風 柳儿
 船〜〜出さるる喜ぶの塔 柳々
 飛たはまご杖知〜〜不〜〜 青支
 丁どつが水て水の書いひ心 方洲
 水きく雲よりらるる花さうり 羅後
 つら〜〜巖〜〜一尺 牛

美著房の軍家よ入て

雲〜〜あま〜〜房中暮る〜〜 風状
 ひ〜〜柳も涼風 英子

知と〜〜あて風のそらるる庭う那 英子
 隣りの秋〜〜か〜〜夜 風状
 別

春あ〜〜い庭〜〜は汲ん 蘇の下 青支
 百あ
 山秋よ〜〜山 風のあも 風状

七月朔日山崎邑菅氏を訪ふて

三里あて層よさく〜〜やうさの秋 風状
 印よあ〜〜〜夕らやの種 梅照

風物子の春り終ふや

春を神の風の音あはれあはれ

梅窓

春をそのまうよ秋をゆめ

風状

雲はまきと人を宿りて雲をひて

この葉もよもわかろるや葉のそと

風状

國屋よのせむく神のあはれ

葉

四季の句

似せりの海を思ふまじかき

蘭

目よかろる風のわらわら

梅窓

きぬくの神ハ晴々り又む

葉

初春や雲すけしつゝ

梅窓

暮虫よぬの降る日ハ何と啼

葉

名月ありとれハ

月今や月まてきり

梅窓

丸形巾をよ

葉

そとそ風物あまりり終自決りて

あふ春は別るまよのそと葉のそと

湖帆

別るもまやま目く

風状

般くの春をさすて

先月よまじり涼

今

今と一葉と落合の瀬戸

湖帆

風状雅仙よりかきまゝに作りし

け若の風とそ秋の半一もめ
露ハ言葉葉のとよ重く玉
何及
風状

歌仙

かや菖草の門や草字の門かま
宵あも月の日あふし松
梅窓
風状
一あくく〜〜と〜と〜と〜と
ふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
風状
扇あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
葉

や〜と〜と〜と〜と〜と〜と
湖帆

下結音結つゝ又あのかから水家
梅窓

何もうも珠おも作せめく世から
葉

詩ハ習あ凡る鏡た〜と〜と〜と
風状

のりうけハ先ああ〜と〜と〜と
梅窓

山あそだのちハ〜と〜と〜と
湖帆

二献めふもたの〜と〜と〜と
風状

七三四六市〜と〜と〜と
葉

あせ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
湖帆

ちやん〜と〜と〜と〜と〜と〜と
梅窓

探多村ハ味中ハ外のそらざり

景

山ガ捨ハ似テ笑ハくほく

風状

川ハ舟ハあやとあやとあやとあやと

梅照

あらびハ自然と天と福先りり

湖帆

より捨テ侍ト見くらや

風状

刺ツて四又日吹角とあや

景

茶屋の隣 住居ハ可不可の香

湖帆

あやま 一まを ちから 冥守

梅照

まじとめの梅まじらんハ湖小系

蘭

ほろろびも捨あああなる

風状

肘と曲テて 樽と活乳ハ町まぐれ

梅照

せとくろり 車一月ととろろ

湖帆

まあま今と流る 秋の川

風状

まうたも 像ハ神りりうぬんか

景

笑ああよえ来とつざあへき

湖帆

とられと指で 捨る ま 少

梅照

子の中よひとり 籠のまをさる

景

短糸の 濤治 真の 盤あやぐよ

風状

る 度ととるめいさあんの 花の 糸

梅照

春の ぬまの ときめ 多 時

湖帆

勝別

まろくくいまちや二日月

葉

あひくられ又響きゆ木

風状

勝あ

深つくせ増穂の糸を及らう

梅窓

あて出るまよあうくくさあ

風状

留別

極くあまあひくくくくく

風状

金昆房奉納

あひくくくくくくくく

全

七月三日お藻庭を訪ゆ

くくの葉も月も三日をくくく

風状

くくもあひくくくく

冬扇

洛の風状河宗去年の波の國よけりつづの
浪平くくくくくく月とあはれ舟の一集潮い
まくくくくくくくくくく玉を拾ひあ
榎坊をくくくくく

風のくくくくくくくく

冬扇

くくくくくくくくく

風状

くくくくくくくく

ひくくくくくくくくく

風状

あひくくくくくくく

喬松

ま風状子けきて清いあややゆ

付も水の甲菊や 杖か花 喬松

月とみの名々あ 足知る 風状

標名を記して

移抄のらま先を垂くああさふ 全

清の風を風子小扉扉とてうけて

そくそあふ一葉くろりや乃の風 文竹

風をさる人へてて留と

雲もあや清いありやまてと節あり 瓦冷

先ん一葉より 清くこの葉 風状

風雲為美人今をまあり清く對して

何れも葉よ垂てもまのひよりま 柱山

秋まて清く譲り 今あ 風 風状

秋二章

状さくもふ垂く清のあさうか 柱山

草のうのくそてちりなり萩の花 全

清の風状大雅を對して

一帯さあふりてはるよ葉の神 記祖

垂く扇をとりまうあ 暮 風状

旅見銀汗

早も今也 見く島わくハ伽呼子 全

風状 雅士の花洛の月は塵にけては國を
草まらうし 花をば訪ふ

三のあしはまるくやきふし秋の草
到て夷則の律を今も友

風状 先生は花をば訪ふに東の海の花洛に

破蓮を風流て目もや若くの花

拍子よついとくまはる青の

蓮日宿も海流を流て下り流ひ金屋に
あてるとは花をば訪ふ

笑く草子粒ある人臨院ふる

流をつくとハ松前出る杖

風状 盛石

風状

風状 茂然

風状

三人

杖

新仙

物の因の世帯やあはれてくさる秋

柳ハ桐をば使さる毎

持ハ風月のさしりも角あせて

りせんよめの抱きりあがり

面白くハハの筆ハ文も

筏使りたるきさ海山

^ウ垣堵めてあまを築代神の松

梅と子よもの多いたる

希はれを知るとこの年まら

三を下さハ合ひぬ声なり

あゝ扇

風状

風状 盛石

風状

風状

風状

風状 桂山

風状

風状

風状

子細よころを割て糸細工
 掃と成てもあり親の法
 ころあきまはまうさ轉のころあ
 月と標子旗ハせる
 石塔のつくく馬さうころ堂
 芥ハ紙志司なる人
 花よ出て花ハ葉のさらく弦
 肉と卵とまきしー春の目
 離酒のた袴く弦おとんが髪
 あまうしりまハ驢牛もころあ

出石
 冬扇
 風状
 杉山
 冬扇
 風状
 子露
 出石
 杉山
 冬扇

唯もてありれも海り浪無きまの松
 羊頭ころりハお々の風
 孝鳥何よ化してもふくまきん
 世男の事ハ眼と穿て親
 つうくと揃さぬ茶う茶く成り
 糸帯てらんるあうくくの跡
 糸と垢離の帯をねよは女日月
 まてこの武士の靴なまきくは
 帯と着とぬおふか備くまのく
 高のころりハ源氏繪の雲

風状
 杉山
 冬扇
 風状
 出石
 冬扇
 風状
 杉山
 冬扇
 風状

あるまじき事なればうけよわらわらわら

岱石

海とせはちて遠あさくあり

相山

箕盤よのせて突きたるこの火

風状

痛さよあまけりかき

冬扇

園くをあのきて花のうらぬ山

桂山

去る相識もなきあそび

岱石

風状先生の對面して

野とから浪もよるの草あらし

甚子

かこらぬ花をよこし

風状

別

なも今も雪をわらわらやあらしの雪

相山

あさくかきありし時あさく見か

瓦冷

草のたしや星も八目も明もあ

冬扇

別

さや橋とくあゆむまはらもあ

風状

又月八日中田井末業店を訪あり

握もりの元てうらわしきうら

風状

節のほめをよのこふ

甚目

風状初宗より先ては新戸を詠き終へハ

かきこくして一葉落るるに 國因産 其目

沈の蓋とる弓 張の 籙 風状

傍々も初一ノ金の文ありて 月止

落る節中 ありさるるも 文松

伐ルさるる景渡りてふられし 文石

其多難 擡る 岩 ありむり 孤竹

如く 今中中 一首の好脊山 花桂

吾々の詠者ありてはとく 文川

拙却のともやう 詠る 裏 文川

歩 浅

回りまて 百合も 起キ ありりり 白梅

きひ 鶯の 着をさるる 鶯の 風 梅曙

後進 自勝 終 あり 旅 離 之三

此を 智は 月ハ さまさるる 水て 表 葛 系 花桂

紅葉 ありて 園を ありて かん あり 其目

里の名も ありて 鳩 ありて 大鳥 居 文石

一歩 ありて ありて ありて ありて あり 梅曙

去スの せめて 後 ありて ありて あり 孤竹

類ラ ハと ありて ありて ありて ありて あり 靴 籠

二 尾 ありて ありて ありて ありて ありて あり 文川

こハ斗もろり〜

梅

一口ハ奥も言ぬム

文松

手さすら〜向ひ

日止

け事の新をり〜

之三

後て為めハ

文石

陰ま紙も書も〜

月止

有る〜

概筆

身中〜

奇淡

漆形〜

白松

中宿へ出る三ヶ月の方

孤竹

習し給まで

花桂

至あも〜

白松

城〜

文松

扱を〜

文川

種や〜

之三

入習〜

其目

目と〜

奇淡

午時後

河津や〜

其目

十六夜

いさふあふ又あふきのひうし
山 暮目
木枯や勝子の裾ふあふくも子
全

けしや精シラガいとりは月老を
花桂

鶴 鱈よ 鮎よ 庵 丁
風状

後桂あ中吟

書を焼く音陰沈みや月の庭
花桂

あ外野笑

山の管と糸の足あげや萩の宿
あ溪

空方正面 胸あつ間の月
風状

あし吟

るの星や唯そのまの神無月
あ溪

夏秋二章

あつりあつたの空や夕附おとくも
文川

春のう

梓あふまゆりや松あつたの夜
文松

沛 新講

草もあつたあつた 清くやあつた
月止

十月は空ありてこの月この日ありて
あつたあつたあつたあつたあつた

日 稀よあつたあつたあつたあつた
全

春の夕

暮あて煙々ありさうねる富士 月止

春夏二章

柳 柳陰うまけいふ命 深の那 全 又石

飾別

樹 一夜おまんまりの 柳子百里 暮日

留別

秋 ひと夜短くぬしあそひふ那 風状

七月九日觀音寺澤

既日まると宿ありて

夏りあて空をふさぐや桐の葉 風状

秋ありーーハ三日のまれ 馬耕

山低く月のころもつそくまゆ 楚蓑

下略

長餘念と宿ありて

神 風のおそひとまろや萩のりや 風状
空より入日の秋とらるる 文川

こゝひさ

八晴官奉納

松 吹て鳩や人あそび山 風状

一夜高山宗鑑のちゆき
こゝの秋ありまうりて

下 のあそび芳りーあそび 風の秋 全

勝お

凝る雲の心も憂ゆり秋の目 楚雀

あま

まよひのしらべもあはれ老の風の
神うらりらあまの

あま

後をこころもハなす 秋の聲 風状

離別

待つらん柳あはれ日ハ風うらり 為新

浮白まよひあま

こころもあはれ有り 風の音 風状

福田系平田氏とまよひ

風あはれあはれ涼 杉の馬場 全

風状美人まよひ

風とりあはれまよひあはれあはれあはれ 為新

七夕

辰うやまうらりあはれあはれあはれ 全

名目

目の届く程と今まよひ月の子 全

あま

あままよひあはれあはれあはれあはれ 石文

月清し梅もあはれ秋の花 全

梅の後さらさらあはれあはれあはれあはれ 為新

日のあまあはれあはれあはれあはれあはれ 為新

燕系

後とあはれあはれあはれあはれあはれ 全

梅もあはれあはれあはれあはれあはれ 石文

湖の若くりつて柳ややとくさくさ
古石

影捺上
柳青や新樹のふふ不二の春
立柳

麻 せん
松うらりけり水てすゆ少夜しくれ
全

卯月よ夜と見えて
長くくと卯月へ越や夜の花
梅月

歡言堂よ色夜して
又月面やあまの矢せんあき
全

三月
言とある花ハ名のもや春の暮
非蝶

用居
葉葉踏鳥の足青あかむる
全

福いぬうらむものもや浄土寺
月湖

風状雅丈と對詠を以て

あ 陣より先て草のそけあはる
樹よ鳴く虫ハ夜とあはぬ声
風状

風状の籠帯と尋て
川 幅よ深くさくせそ花あつら
梅月

岸の麻儿も一葉の
数
風状

あま風もあまそ新柳の花をさき
海浜をちきりて別まよまき
全

川 柳風踏ん草の花とらん
風状

惜しむ糸の袖よ存うぬま葛のま
留あ
全

飛ひ退てかたぬま見ん庭の松
風状

西竹の穂をこし一松見んとしめ
豫焉書は次よ来て

いく秋そ松を訓らり 残る音 風状

中ノ庄坂上氏の館を修んで

庭の階一 窓をさきとわたりけりも 全

目彩のあはれ 起る草 荷も

再會を初して

前ゆきてぬらひ 侍人 秋の夜 全

留め

竹クハ又来るるめなり 舞灯籠 風状

念之壺

正月を奉祀するに 切籠の那 全

尾龜勝田氏(推素) 軍旗を得て

言の葉ハ秋に秋あり ありさる 風状

いよ侍得るり 今日月初月 方之

地室を杖を携ひけり 免て法談を説て

その声もわたりて 孝徳 全

そよよとわたりて 夜 風状

四季之句

梅咲や古き葉を片下り 方之

伊勢難波淡香の 酒や粽の香 全

舟のあはれ 障る 嘆や 露の月 全

あううや 結をわたり 舟の久 全

四季之句

春ハ春よや門とこころしてうらみと多
みと悪くあつりよ海む鳥う那
地の下とゆあ音や秋のくれ
あせ居るといあきとて新蒔穂を
全 全 全 全
随柳

枕帯唐を訪めて

脱盡し一筆よあやあきも指校の那
風状

月侍ツ程のくくさありく
至冬

風状雅見は初てまを風居の秋くさを物々

口門て穿入る居の初音う那
全

海と稲よの浪と見ゆる 撮
風状

春あき二季

うらりよおし

白雪や日さく挽は彩遠き
至冬

立居りも風の音ささる 紙子うか
全

解とわらわして風状雅見は里小春あきあの一
いさ松坂城いふしはまのさかあまのつた
あきうらりよおし物あのおくれからあきうらりも
ま流れて居あふ居の 踊う那
安之

咄も勝あは夜を侍し 秋
風状

四季之句

涼しきものくあわさる言葉は
全

同し垣根のあまのむ虫
安之

うらりよよ咽をかいつくし山海うか
安之

並雲やつ本々の船のあき
全

日のうちらよ麻あやまらん招勢 安之
二ツ毛の紙ふと煙——舟の中 全

首尾

香と海と煙指のたもとぬりかゝる影の
いうてつとまうりまうそ 安之狂吟

月へやとらく初青の待倒き
あつとく曇る余花の曙

弟履五指の時まも撫をえて
煙い麻おハ笑いまよあり

烟あれハあつ煙電の遠眺
まのうま風の撫まらぬお

まのうま風の撫まらぬお

一畝ハ只都坊まのあ仙花

鬘あま馬の足ままま

人あまぬ婿礼あまのりまう

まうりの女地と見まぬ 良

まのの春の行あひひ

底くまま青柳まま

風状ままま

初秋やまのう涼——風の友 是徳

まの春のあま居りま 草 風状

春秋二書

まのあまりまのう宿のまま解 是徳

名月や丸ままうりま 懐ハせ 全

風状雅子よけり先て湯を論ふ妙思を
よきまて

帷子より義の付や初あしり

旅店よ菜なり一章みはる

春夏二章

行くいの人 叙う寸一 離の戸

比日の嫁もよる好る 四柱の那

室敷の風状美子よけり先て湯を論ふ妙思を

初あしり一 向あふ末のちきり

訓ももも色さ文 月から叙

國よ今て西よまてさうんとさうん

音路よまて西よまてさうんとさうん

月照りけり 影りけり 空

求已
風状

求已
全

於
風状

全
竜

あしり吟

河野川

夕日よと 後の投槍や 川よる

風状雅子よけり先て湯を論ふ妙思を

芦の穂をの葉も麻もよる 葉りけり

こころのち月と満ちかゝる 月

四季之句

川舟のゆり船 柳の那

りの葉よあしりれは 消る葉り

名月や見おろぬ人よ 消る橋

枯きりよさうりて 啼く鳥り

積清

全

全

全

風状家道之ちりてあつてあつてあつて

初々葉もしやうと神杖やさくやく葉

蛙も虫の音もあつてあつてあつて

風状葉子よけりてあつてあつてあつて

回の方の白し奥あつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

風状あつてあつてあつて

了地の鳥はあつてあつてあつてあつて

昔老の遊ふ鳥ありあつてあつてあつて

名月や丁深あつてあつてあつてあつて

尾るやとり火あつてあつてあつてあつて

白蝶
風状

東里
風状

東里

全
全
全
全

皇初風状子の船はあつてあつてあつてあつて
春林はあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

富弟のそなたもあつてあつてあつてあつて

菊歌
風状

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

又月の文字あつてあつてあつてあつて

全

十字夜や星もあつてあつてあつてあつて

菊歌

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

まゝ扇をくればあつてあつてあつてあつて

冬年
風状

春 秋 二 章

清 廣 翁 著

ここの葉のそたのりこもり 柳を本

冬 年

何事も訓こもあうー 後の月

全

風状子よまきりりり

あつはと解あふきり 今目の風

眠 湖

うげていさきー 言の葉をあ

風 状

夏 二 句

水折のそよ 晴こもい思ふこみ那

眠 湖

風状子よまきりあておきこもい

風流のそよ 出まきり いぬのとの

冬 春

月夜も星のそよ みるる

風 状

あきいさ松おむしりいさおきこもい

葦席のそよ 宿中 垣根の那

全

とりのちりこもい 月 徒

冬 春

四 季 之 句

年々歳々花お似歳々年々人不同

とりのちりこもい

年々や花よつとまきり 見と般

冬 春

敵をり出や 木風おこりの月の空

全

侍人のあき夜あまのそよぬこみ

全

名ぬ富士の裾よほこりや 庭の言

全

風状子よまきりあておきこもい

又月やあはぬ友よ訓こもあ

道 可

面の一葉のそよ 極

風 状

同樂庵に入て
子株の蕨鉄子詩ふ

名の水ぬきももろもろや蕨鉄山	風状
月有て尾の出る鱗	乃の
お揖のありく秋ハさそあして	方之
流んと帯もちうろもそなる	白蝶
苔の輪の中ハ瑠璃よんばよりり	秋吹
真菫てましく大文字の箋	冬春
横たうろ居あつてやうく鐘の声	冬里
胸の名の船を拂ふ	風状
冬	

祇佛祈りてまりと森入く	道あり
人肌はくくは家の大加減	方之
流あらんまひうけあふ	白蝶
瓶と音して鶺鴒のむく	毫吹
月と尾の盆とさそあぬ皮絨布	冬春
師の蕨洲ハむきく夢のあ	東里
流くあまよあはれハ流うちて	秋吹
穢一本の若て百石	白蝶
なまらてうたのまを喚く	方之
碓石傳く三月の海	冬春
下略	

うらみあつておそろしう一宿の花
 頃よ華あハ月たつふさ山
 年の産つきあする能楽啼く
 あまハ撰くつはあまやりこ
 得巻もちいさくはゆる廣小浜
 ありあり人の草取りす昔
 一回ハ師乞のあまかりるさ
 多あつといふあま一兼年の切り
 貧しいさよあまの利権り移りる
 差占うておかしきあまのせは

おま
 風状
 新取
 求已
 積法
 安之
 一家
 至多
 風状
 毫取

南島へ松ハ宮内のたをある
 お見の鳥をとらると夕立
 あ佐藤のかしらららるるの月
 あうらさまを船船なる能時
 蹴りよ念の入りよる本履
 ころりよ肺とてあまあめく
 其詩酒のあまあまの涙の夜
 東運りあまのやまに干
 勝あ

求已
 積清
 安之
 一安
 至多
 求已
 毫取
 安之
 勝あ
 多春
 至多

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

留^{とど}別^{わか}

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

こ^こぬ^ぬふ^ふ富士^{ふじ}

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

梅^{つばき}の^{つぼみ}も^{あけ}風^{かぜ}の^{やま}も^{あけ}や^{あけ}絲^{いと}山^{やま}垣^{かき} 安^{やす}之^し

西福寺より

あゝ思ふを初もさうあは風なりか目 風状

風状雅仙神て予の芽屋よ素り移ひそ
友とらの雅舎あはれも予ハさるあふたうハハ

根よ居りて声あささ虫や草とさち 文章

長源寺より長源丸の文章を乞てる

又月のおもひけ握る今日や今日月 風状

皇部風状雅翁の積館ととやいふよる邊
飛鳥とさく春は昔種をさうしてさうよ
御りぬきふハ尋んあさハおせんとおひひハ
初るあく御翁の信しとちのおろろるよ素
と送りぬ

素あさささあさへ居る何事ハそ 楚得

船の目一一む八月廿日 風状

祥寺の朝のぬく日 諸舎にあり移りぬ
他(出)てありぬきあはる松とくけいさあひ
移ひぬ中子移りぬる言の葉よまや西を
足知りぬるん世せしむる

んまてうけりや秋のからん草 風状
きくさぬこよおとらうとて耳 楚得

西福寺之句

常よりハ居る目録一むあんの花 舞後
摺舖して枝よ素らんやとささ 全
初せぬハ素よまや向や魂まうり 全
松んて又枯神あささ妹ウ門 全
あさささ

つ夜寐て室小名あさ川椿の那 湖庭

春

花の名は秋のちり花や福寿草
 行春や船い破もあつりゆと
 風かきし移ありの柳の柳
 日きうてらん伊勢の白ふも春の父
 舟は霧もまじり花の足
 る遠の妻はまゐるや猫の揚
 うらひときや言の思ふ人の初那樂
 揺よいかのての目なり一 樵かゝ花

夏

獣の鬣も近し一 ほととぎす
 魯乃

五月雨やあさぬ水は川の音
 梅ころも葉もあついで衣
 幟見や富士の裾は人かゝる
 卯の花やか久山衣かあつ
 是不とのきハまゝぬまゝさ
 一ハや人の喘もしりささ野

秋

曙を菊ようけとらけ日
 名月やとらけ後義ハ人
 踊子の不意と近しあつ
 始年一系知しほまき布根葉
 然あハあつし一 宇平打守さぬ

桃園
 初管王
 初足
 魯道
 楚得

うゝ糸の衣のきんととぬのもは
魁て草ふり先よるたたの那

古石
起石

後月

持てや今宵十日あまりの三井の月
七夕やあらいいと新まら

秀景
湖外

あ

初言よ見せらるるり毫田川
川音を空よかへてくま
舎利のよりのていなり一時西雲
葉の付く樹はまき少くてふまう那

秀景
音道
楚借
古道

あまの句

日の曇よ休んでハ行時ぬう那

山槐

松よ風を今朝ハ戻して氷の那
あまのあうるやうなるも飯汁
むきしゆハ扉風おきしゆ那

畏天
音山
是橋

琴の音をのせし裡の繪續よ

さうまらり張りしうちの勅方
浪多ふ中よさうし川や鴻 産

産後
全

四季の句

一本さうさう自あや梅の花
まゝ出ては声ハいつくやうと
山竹や麻ハ剥はて庭の声
吹とあくあハ朝の靴あ那

音子
全
全
全

春

氏の部(奏)一ある音楽とある
すなわち

奇口も天の雲りおちあこも
いりのりり笑り知一んご
出る芽の空へも向一柳り那
ちりは是ぬ雛のち彩や楳の花
青ま
土牛
芳例
柳儿

夏

笑く草も流れて涼一花い後り
全

秋

空飛る時よ暮れ笑くや夕の月
秋風や醒くぬ延り家
芳例
柳儿

是れを母よとらん仔の月
柳儿

あ

袋出せ音よつこたふは流るる
空菊やともは流る樹くの文
風付けて戸はゆるるあさるう
柳音やたあがりんハ路中長ん
柳
土牛
青ま
柳儿

法師士の白よ並へると新穀舎の川
あそらうとてあせあそら
新穀新のル下よ送りゆる

下戸あつハ能をもやうハ水面積
一線流ハ張一さ
あそ
あ松
風状

糸の濱もよいかやとささありこれ
いづまうんそ落し風のあつて風はこ
仲くぬくまをうけつるこれへの後人の
心のたふあつて我々の心もつせんも
肩よ藤垣草のほくあつてぬくうふまひくを
まもつて信智の侍りとうさつあつて
あつてつる中書よつてありあつてつるま
節とつとつあつてありのわのつとつ
種となつて御代のあつてあつてあつて時
おのこあつて化して風ありあつてつる遠入

物中と見ると其はつとつあつてつる
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
なん誰のあつてあつてあつてあつてあつて
つとつあつてあつてあつてあつてあつて
まいつとつあつてあつてあつてあつてあつて
出つとつあつてあつてあつてあつてあつて
おのこあつてあつてあつてあつてあつて

宿かりの

藤垣草

寛永の月

青史

新歌合

別

けしきこのや跡ハ後もふあうり
 声あゝいんりーあさんうり草
 木屏や風よあせりりる
 水堂よあや花の数の数
 のりあゝく都よりささき

羅後
 菜子
 柳儿
 芳洲
 去牛
 妻史

も松二夜のあひ

糖房やむすもあゝも同く風 風状

今や下深あゝん浦の業内せんとして妻史去牛よ
 いさありれ浪うらまんと一文字よ屋の根とまありり
 おひさ川と流りけよ雲の貝拾ふよとあゝか
 やくあゝあゝと見つゝてあゝ松よいりり一月唐平
 入るハ酒肴を用ゑる一旬を測ては終り唐史我史
 とあゝて雅君系（ゆり終りん事あゝと）新歌合
 より昔あゝりゆゑも月とあゝていもをあゝち糖房あゝん
 繪あゝひまのゆゑぬと詞を讀せハ梅あゝの情なりさ
 今ゝありりーあゝあゝり終りん事あゝもあゝハけあゝ終
 けあゝあゝーあゝあゝあゝのあゝあゝて

古々をるめハ秋のやまうしうの都

柳々

咲く野よさくら心 燕のち絲

風状

彦ととちう水て四人を手籠かもしく

増清の後園に鶴と
多く種をとりて

鶴跡は風のあそ名いなりりあり

風状

きり軒借よおそやそむも

栗松

石湯引く埴やきの形月飽て

喜交

ふくさのおりーちの川と尺八

薫岩

そりつてハ舞う大キー 廣書院

古牛

糸 障りかくもぬる川うまり

柳々

つとくふと結ッ心く 暮をやさ

寿松

知年とあふて見れハおとあひ

風状

蘇刀ハ斬すともあり射しぬ

蘭岩

けりク帆の八分糸も雲をん

喜交

山越やまざとも建あ名架の花

柳々

こよ葉葉如く幾代うり

古牛

夜も明くよ燃れハ喜交古牛ハ高松ハ海人

とありーと柳あけてこそと唐のよむも

きり酔もこれおももろうんハ古牛ハ庭よ

下りり下りの喜交も打連てゆきり

唐よりりの句よ

山陰に待小月あね夕ふ那 夢松

あをを夢人いごとくまき 踏小松 風状

唐信舎主人を待りて

あさくろふ杖をさくく垣根の形 全

唐の化粧と成て 稲 書 葉谷

唐主あさくろふを愛して 阿堵と那 何さうはく
是もよとて出さるる句もあさくろふなり

唐のこの句のあよと移るる 唐の藤は 葉谷

は白も沈文書とありて 友事よ事なる

葉を日よあをむむとりのあふあふかきむむむむ

日よ流ささといりてあことりかとあよああふふ

唐の藤はさくく 唐の藤の漢草とやいふん

唐中 標歌

唐晴見稲

あの子 玉吐く稲 中 唐の那 柳

唐後 藤

あの子 晴いさまん 藤の里ねい 夢松

唐朝 夢

唐あや 馬の起きる 人の舌 風状

葉谷柳の日あは 唐法園 葉あさくろふと白くわり略し 土目

室勝るれ八栗本寺のあはく 唐の柳は唐のあはく

八葉の御書も向方十八町の坂あり。此處
揚ぐ着ていゝまゝの御書もつゝいゝまゝに
指とよくてもゝゝいゝまゝの御書も
日輪の御書もいゝまゝに
あゝまゝの御書もいゝまゝに
流るゝまゝに
かゝるゝまゝに
漸目のいゝまゝに
歡喜のれとあゝまゝに
在りの方とあゝまゝに

是のいゝまゝの御書も
我神といふこと
海舟の御書もいゝまゝに
遠のいゝまゝに
杖とあゝまゝに
のいゝまゝに

いさや指環（あし）〜さしき〜十のちよよ〜り
トリ又十余丈たりのありて身中の種よ〜り
なよ大師の堂ありるをさしきて其方よ〜り
新あ〜りの風の〜り〜り〜り〜り〜り
春に樹のあ〜り〜り〜り〜り〜り〜り
は〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
いさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
仙家と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
地底の〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

いさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
は〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
いさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
は〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
いさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
は〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

十一

海にまじりて入りて八町の坂をさしむるも
舟の毛をさらけり跡もくも清浄なまて去るも
せよとて舟の極を踏むるあまの舟を乗るか
相可もて意を解き

市はありて入るなりみかおこし
たのしくはあまの舟なり

一より十までのおとめてあま

ゆきまといまはなれて十八町とわらふ細き舟に
あのおこしはあまの舟に乗りてあまの舟に
あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
入てその舟の舟を解き道も信を乗るあり

あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に

日のうらみとあまの舟に乗りてあまの舟に

あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
草の舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
みくし舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に
あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に

あまの舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に

け目と柳の舟に乗りてあまの舟に乗りてあまの舟に

幽閑草履の滞りたる中ぬゆりの
つとくさりの

浮屠ケさるくいなりの山越しん
一夜くさるし新く虫 風状
栗松

名月

名月ハおしうぬみの光りく那 蘭谷
明ケハ秋名もさる月もたきや 柳江
る年よせし耐ハなり月の庭 栗松
眼の玉よあこそ落しきあ月の月 風状

八月十七日兼松竹々よさありれてあなつりく
三子舎と防めらるるさるりくれい
留る防めハままたり月の雲りりく那
と中流しとるる流りりやまありりく雲あ
白よ

是ハくまら言毒やまの山 桃源
空をと遊て流をたほさやわくさる
三日の夜やかつたおこの音あけ 全
音の目ハ何とあつるつと馬あ馬 全
指月堂へまありりよ是又るさるりくハ
第借りてやあつていぬる芭蕉が 風状

海東の好赤争ありて終りりくく白子

権の舞子健りりてあそく國の富士 芳山

あそく吟

清の音をかき人あまきや一時毎 兼信

あそひの山なり一勝極の如し

海へつる月の屋し海を照つちる那 風状

別

刺のわす蔓もと者る藤の那 柳

暮ふくさ日和やと野ふかな 赤松

年礼言松の人くく年

あひさきとてあそくく

たあ（引）人まそ月の汐汐うね 風状

駈 汝乃 翠まは けしき

然り 大入る けしき

河多 潤くく けしき

澄波 急流乃 活心 けしき

りく 家ま けしき

日長かきぬきつるまじしこ
 月々ちちるあつるまじし
 地まつりぬきつるまじし
 飯まきつるまじし

寛文(改定)の
 日 出村山 為

誹諧書籍目録

京二條通富小路西八町
 橘枝堂野田藤八板行

淡川一冊	貞徳翁	合可見	隆志撰 三冊
油 うちと一冊	貞徳翁	不郭公	同 一冊
一万發句拔華	羅人撰 一冊	妻乃乃林	林石撰 二冊
握墨	五始撰 二冊	梅日記	沾身選 三冊
福一滿	五始撰 二冊	七十子	同 一冊
雲乃濱	五始撰 一冊	仇諧石	長門 可考撰 一冊
六竹	風狀撰 一冊	秋乃風	長門 素風撰 一冊

鳴澤言根

孫人撰一冊

本うらゑ

江別秀根

治天撰二冊

今年竹

風狀撰一冊

富士如雪

江別

柳契撰一冊

訖社家譜

至吾鳥譜

丈石選二冊

増補花大草

住角

一冊

飯富士

風狀撰一冊

反古さか

麥林

一冊

とくし

風狀撰一冊

山ふ月

瓢水撰二冊

行合田

四角高印

風狀撰四冊

后乃花亭

大阜撰冊

田舎

